

解説

ある日忽然と悟ってテレビのスイッチを切り、これからはもうテレビを見ないことにしようと思つて決める。ささやかな、しかしきっぱりとしたその決心とともに一人の男の身の上に生じたできごとを描くひと夏の物語、それがジャン・フィリップ・トゥーサンにとって五作目の小説となった本書『テレビジョン』である (Jean-Philippe Toussaint, *La Télévision, Les Éditions de Minuit, 1997*)。

前作『ためらい』の原著が出たのが一九九一年だから、これは六年ぶりの新刊ということになる。その間トゥーサンはどうしていたのかといえば、作家としての活動よりも映画製作に精力を傾けていたのである。『ムッシュュー』に続き『カメラ』に基づく映画(『カメラ』、九二年)を自ら監督した後、招聘を受けて一年間滞在したベルリンでも、オリジナル脚本によるテレビ用短編映画を作ったという(『ベルリン十時四十六分』、九四年)。シネアストとしてのキャリアを着々と積んでいったわけだが、しかし小説家トゥーサンにとってはいささか長い休暇だったように思える。とはいえそれは作家としての意欲の減退を示すものでもなければ、創作力の枯渇を意味するものでもなかった。『カメラ』に出てきた比喻を思い出すならば、オリープの実に焦ってフォークを突き刺そうとするのではなく、そつとフォークを押しつけて粘り強く攻撃を重ね、やがてオリープの実がぐんなりと抵抗を弱め、突き刺しやすくなる頃合いを待つようなやり方。あるいはこれも『カメラ』で触れられていた、序盤は持ち駒をほとんど動かさず駒の「潜在的なパワー」を高めることに専念し、機が熟したならば俄然猛攻に転じるという不思議なチェスの手。そうした戦術を自ら選択し、数年間に及ぶ持久戦のはてに

勝ち取られたのが『テレビジョン』だったに違いない。沈黙のうちの戦いを経て作者は、質量ともにこれまでの作品をさらに凌ぐ充実した一巻を手に戻ってきたのであり、トゥーサンのお読者としては嬉しさもひとしおの新作と言うべきだろう。

一捻りした冒頭の設定に導かれるようにして、以下そこから出来る事象を丹念に描いていくのはすでにトゥーサンのお確立した小説のスタイルであり、本作でもその様式は踏襲されている。また『浴室』同様、いかにも作者に似た「ぼく」を主人公かつ語り手とし、『ムッシュ』のようなとぼけたおかしさに満ち、『カメラ』のように一見行き当たりばったりな展開を示し、『ためらい』の如くときに偏執狂的でもあるのだから、『テレビジョン』を過去の作品の延長線上にある一冊と考えてまちがいはないだろう。しかしながら、ここで何か決定的な変化をトゥーサンのお世界が示しているという印象もまた否定しがたいのだ。すべてはこれまで以上に韜晦に満ち、しかも率直、ゆったりとおおらかで、落ち着き払いながらも神経質、しかつめらしく几帳面でありながら随所で滑稽さを発揮し、クールで同時に温かい。『浴室』や『カメラ』の約二倍のボリュームのなかに、いわば幾筋もの流れがゆったりと流れていて、それらの巧みな配合から何ともいえぬ味わい深さが生まれる。テレビを見るのをやめることは、一個人のちよつとした決意にすぎないが、しかし同時に真剣な意志表示でもありうる。すなわち主人公はテレビから離れて初めて、いかにわれわれの日常が隅々までこの小さな四角い画面に支配されているかを如実に悟るのであり、その画面に背を向けることは一種の反社会的ふるまい、現代の文化に対する抵抗となりうるのだ。

とはいえ彼の反テレビ闘争は、自ら言うとおり少しも強張ったものではないし、それどころか実際のところ彼は決心した後も何度かテレビ画面にじっくりと見入る。辛辣なテレビ批判を繰り広げな

がらもつい深夜、隣人宅のテレビのスイッチを入れたりする彼は、仕事の最中はアルコールは一滴も口にしないんだときっぱり述べながらその数行後ではおいしく杯を干している姿に明らかにおり、厳格そうなわりにぐにやりと柔らかい男でもある。そんな主人公の美術史研究の内容がまた興味津々だし、妻と息子を愛する家庭人としての肖像もユーモラスなおとぼけに満ちていて可笑しい。東の間の独身生活を訪れるさまざまな誘惑を前にしての欲望の揺らめきもつぶさに描き出されているし、また異邦人の視点から、公園で皆が素っ裸になっていたたり、旧東ドイツ側の街が荒涼としていたりといったベルリンの表情も鮮やかに捉えられている。テクストはそうした幾つもの断面を切り出しつつ、一人夏を過ごす主人公のさまよいの感覚がすべてをゆるやかに統合する。さらには、ティツイアノとテレビとの意外な関係に表れるとおり、それら複数の筋のあいだに一瞬きらめく類似の発見がまた、随所で読む者に快い驚きを与えてくれるのである。

水泳を好みながらバタフライやクロールの派手派手しい動きをしりぞけ、「だらだらと泳ぐ平泳ぎの心静かな官能」をいとおしむ主人公は、緩やかさと静けさの使徒であり、同時にまた自らの思考や太極拳のしぐさ、あるいは妊娠六カ月の妻が腰を揺らして踊る踊りが共通して描き出す「アラベスク」をこよなく愛する、曲線の味方でもある。そして言うまでもなく本書の最大の魅力は、そうした緩やかさと静けさ、カーブの魅力をそのまま具現するように柔らかに湾曲しながら続いていく、文章そのもののたたずまいにある。主人公が『絵筆』と題する論文を準備中という設定自体がいかにも示唆的だ。つまりテレビの画面に背を向け、自らの身のまわりに改めて注意深い視線を投げかけて、そこに浮かび上がる表情のいちいちをキャンバスに向かい一筆一筆描き留めていくような営みが、まさに反テレビ的な闘争としてここで丹念に実践されているのである。

「テレビの特徴の一つとは、テレビを見ていないときでも電源さえ入れればそこで何かが起こっているかもしれない(……)」と思わせることなのだ。だがもちろんそうした期待は空しく、常に裏切られる。なぜならテレビでは決して何事も起こらないのだし、テレビを介していかなる大惨事や慶事に立ち会えたとしても、われわれ個人の暮らしに生ずる些細な出来事のほうが、われわれにとってはいつだってより重要なものだからだ。」

実際トゥーサンの作品のなかでは、描かれる対象がどれほど些細で取るに足らぬものと見えようとも——プールのサイドの小景であれ、子どもの絵であれ、サンドイッチからはみ出したチーズであれ——、その対象は些細さゆえに擁護され、丁重な扱いを受ける。生け捕りにした蝶を両手のうちに匿って運ぶという比喻が語るとおり、日常のそこそこで羽ばたく蝶の生命に寄り添おうとする意志の強さが、この作品に深い説得力を与えたに違いない。

しかしながら、詩的な美に馬鹿馬鹿しいおふざけを平然と掛け合わせずにはいないのがトゥーサンという作家である。蝶の羽ばたきもまたその例を免れず、美しい比喻に対し、何とトイレのドアの羽ばたきが思いもよらぬこだまを響かせる。冷蔵庫のシダをめぐる隣の隣人夫妻と「ぼく」とのあいだの啞然とするほど阿呆らしい応酬は、何と言っても本書最大の見ものの一つであり、子細に書き込まれた状況のリアルな、徹底した滑稽さの魅惑には、幾度読み返しても唸らずにいられない。いささかずうずかしい要求を突きつけてきた隣人夫妻に対し、堪えに堪えた思いが、トイレ封鎖という形を取って隠微にも爆発する。だがそこにはさらに、トゥーサンの想像力の二つの極とも言うべき「閉じこもり」と「変化自在さ」のいずれもが、見事な技量によって一つに溶け合わされているのである。

『浴室』以来、トゥーサンの主人公は外界に背を向け閉所に閉じこもることへの誘惑にたびたび屈し

てきた。『テレビジョン』のこのシーンでもそうした特質があらわになっている。同時に、他人の眼差しから逃れ出て誰にも捕まらない自由を享受する瞬間もまた、トゥーサンの小説のそこで夢見られてきたのであり、『ムッシュ』が家庭教師役をほっぽり出すシーンがその鮮やかな見本となっていた。出来の悪い生徒に愛想を尽かした彼は、生徒が問題を解いているすきにこっそりとアパルトマンをぬけ出し、下の道から手を振って生徒を慌てさせるのだ。これら二方向の運動が、ドレッツァー夫妻のトイレを舞台とするシーンでは緊密な展開のうちの一つの流れとなって驚くべき融合を実現している。閉じこもることによって主人公は自由になり、いるはずのない場所に出現するという想像も及ばぬパワーを発揮する。開かなくなってしまうトイレのドアと、困惑しきった夫妻とを後に残して主人公は意気揚々と引き上げる。その会心の勝利が、四十歳になって「ようやく何でも好きなことを自由に書けるようになった気がする」と昨年来日した際のインタビューで語った著者の、現在の境地に重なるかのようである。主人公は自らの頭が禿げたことを笑いの種にしながら、しかも哀しいかな女性の前ではなお「ヘアスタイル」に反射的に気を配ってしまう。彼と似てトゥーサン本人もめつきり髪が薄くなってきたことは厳然たる事実だ。だが失われた髪と引換えに得られたものの豊饒さを本書が十二分に物語っているのである。

主人公と著者とのあいだの類似に関してやや失礼な細部に触れてしまったついでに、この作品の「自伝的」要素について簡単に述べておこう。先に記したとおりトゥーサン自身、作家に与えられる奨学金を得てベルリンに、九三年から九四年にかけて一年間滞在した。妻と四歳の一人息子を連れての滞在中、そのあいだに娘が誕生した。要するに本書の設定とまったく同じである。さらにトゥーサ

ン夫人および息子を直接知る者としては、この小説の中の二人に現実の二人のいきいきとした肖像を見て取らずにはいられないことも言い添えておこう。そうした現実との絆は名前に明示されている。『テレビジョン』の主人公は妻をドロロンという、一見姓のような不思議な名前と呼んでいるが、これがトゥーサンの妻マドレーヌの愛称からきていることは間違いない。マドレーヌの愛称は「マドロロン」。つまり「わがドロロン」なのである。息子のあだ名「バブロン」がドロロンと愉しく韻を踏んでいることは言うまでもない。あるいはまた「セース・ノーテボーム」という実在人物も特別出演している。主人公が素っ裸の姿で挨拶する羽目になるその相手は、日本でも『これから話す物語』が翻訳されているオランダの代表的小説家である。こうして『テレビジョン』は作者の人生と密接に結びついた作品であり、彼がかつて来日した折りふと、「ベルリンでは夏休み中、上のアパルトマンの住人に植物の世話を山ほど頼まれて閉口したよ、断れなくて……」と洩らしていたことなども思い起こせば、これはまさに新しいタイプの私小説、というよりいっそトゥーサン氏の生活と意見といった類の書物なのではないかと考えられるのだ。

とはいえもちろん現実との照応はあくまでも作品の一要素、ないしは出発点にすぎず、いっさいはひとえに、稠密でのびやかな文体の創造にかかっている。無為に過ごす時間の充実を描いて、これほど説得力に満ちた文章は類例があるまい。トゥーサン本人は、彼が表紙を飾ったフランスの週刊誌『レ・ザンロキユプティール』のインタビューで次のように語っている。「ぼく自身はこの主人公ほどぶらぶらと時間を無駄にしているわけではないですよ。なりゆき任せなところはぼくにもあるけれど、とはいえぼくはちゃんと本を一冊書いたわけです。主人公のほうはぼくの知るかぎり、何も書いていないわけですが。」

なるほど、主人公の構想する大作『絵筆』は完成する気配が少しもなく、息子の成長のめざましさに比べ遅々たる進み方を示す。「本ができあがるころにはこの子はもう大人になつてわよ」と妻にからかわれる始末である。ところがドロロンがそうしたせりふを口にする時、『テレビジョン』の物語はすでに終盤にさしかかっているのだ。主人公そっくりのトゥーサンは、しかしもちろん主人公自身ではありえない。トゥーサンは主人公とは異なる執筆の時間を生きたのであり、そのおかげでほくらはここに『テレビジョン』一巻を読むことができるのだ。

前作『ためらい』の拙訳が出たのが一九九三年一月だったから、本書は日本では五年ぶりのトゥーサンの作品ということになる。これまで、作者を感激させるほど熱心にトゥーサンの作品を支持してきた下さった日本の読者に、久々の新作をお届けできることを嬉しく思う。そしてまた『テレビジョン』とともに、さらに多くの読者がトゥーサンの世界を発見して下さいませよう。

青木真紀子氏、フィリップ・ドウニオ氏がさまざまアイデアを与えてくれたことに感謝したい。そして鈴木馨氏を始めとする集英社翻訳書編集部の皆様に行き届いたサポートに心からお礼を申し上げます。

追記

テクストの不明箇所に関してトゥーサン氏に問い合わせた結果が校了直前に届いたので、その一部をご紹介します。ドレッシュャー夫妻のアパルトマンに飾ってある絵が「ことによると、古代の王子様かもしれない」とあるが、その *aularque* なる稀な単語について——「意味は確か古

代の王子”だったと思う。しかしよく覚えていない。実は辞書で見つけた単語だが、その辞書をコルシカ島の屋根裏部屋に置いてきたので正確には答えられない。でもご心配なく、どうせフランス人だって誰も知らない単語だから。」

また、バブロン君がねだる「ナンジェ」なる玩具について。これはトゥーサン氏がこの問題の権威であるご子息に尋ねてくれたところ、パワー・レンジャーの背中につける部品の一つで、そこにミサイルを収めるのだという。「忍者」から来た単語に違いないとのことである……。

Merci à Jean-Philippe et à Jean.

平成九年十二月

野崎 欽